
9 9 の扉

茉由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

99の扉

【Nコード】

N7408V

【作者名】

茉由

【あらすじ】

ある日目が覚めると、俺は知らない部屋にいた。
ここに来るまでの記憶は一切ない。

たくさん扉があり、とても広いつくりだ。

俺以外にも人が何人かいて、ここから出るために扉をこじ開けようと必死だ。

開く気配は全くない。

どうやら俺達は閉じ込められてしまったようだ。

白い部屋

部屋の中には、一つの丸いテーブルに10脚の椅子が並べられている。

家具、壁は全部白で統一されている。

扉には1から99までの数字が書かれており、

100枚目だけは数字ではなく天使の絵が描かれている。

机の真ん中には画面があり、映像が飛び出す仕組みになっている。

映像はまるい球体がまわっているだけで変化はない。

「君も気がついたらここに？」

知らない男が声をかけて来た。

多分自分と同じ年位だ。

「ああ。君は？」

「僕は高校三年生の宮川 愁」

愁はにこりと頬えんだ。

愁が名乗ったので自分も自己紹介をする。

とりあえず、ずっと独りでいるよりは落ち着くので知り合いが出来て良かった。

突然映像が切り替わった。

音楽も流れたので皆が反応する。

勿論俺も映像を見た。

映像には顔を白く化粧した人間が映っている。

顔の大きさなどからして、多分男だ。

『おはようございます。』

皆様お目覚めになられたようですね』

部屋にいる人達が悲鳴をあげた。

声は機会で変えられている為、本当の声は不明。

テレビで女性の声を変えた時のような声だ。

『早速ここに来て頂いた主旨をお話しますね。』

【人間】とは理性を保てる生物です。

ですが、それを保てなくなった時、

それらはどのような行動をとるのでしょう」

「意味不明だ！

早くここから出せよ！

仕事に遅れてるんだ！」

俺も同じく理解が追いつかない。

『私は実験をしてみようと思い、皆様を招待しました。

勿論、実験料金は支払います。

しかし貴方達を閉じ込めるだけでは意味を成しません。

そこで私は考えました』

俺達は実験台ということなのだろうか。

話を聞くにつれて訳が分からなくなってくる。

固まって声を発せない。

隣にいる愁も固まって映像を見つめている。

『ゲーム。

皆様にはそれに参加していただきます。

拒否権はありません』

ゲーム？

理性を失うようなゲーム。

そんなものは存在するのか？

『では、ルールを説明します』

ルール説明

『ルールは単純です。』

この扉のどれかが外の世界へとつながっています。

そこから脱出できれば、貴方達の勝利となります。

しかし、それ以外の扉に入ってしまうと……。

地獄へ落ちるでしょう。』

地獄へ落ちるって……。

それは死をあらわしているのか？

『このゲームにはタイムリミットがあります。』

今のところ24時間です。

タイムリミットがすぎれば、貴方達は全員失格です。

その瞬間に毒ガスがここにまかれ、

貴方達全員死んでしまうでしょう。』

「死ぬだって！？」

ふざけんじゃねえよ！！」

また騒ぎ出す。

それを見た白い男が嬉しそうに笑う。

どうやらこっちが見える仕組みになっているらしい。

『しかし、タイムリミットをのばす方法が一つだけあります。

扉の一つに天使の絵が書かれていますよね？

その扉のなかに入るだけです』

「それだけ……？」

隣にいる愁がつぶやく。

俺も思った。

それなら何度も扉に入れば、ずっと生きられるではないか。

それよりもこのゲームは本当なのか？

何かのドッキリ番組では？

しかし本当だとすれば……。

簡単に動くわけにはいかない。

安全にここから出るには、今は黙っておくのが最善の方法だ。

『では……。』

ゲーム スタート - - - - -
『

ゲームスタート

泣いている奴、叫んでいる奴。

精神が安定しているのは俺と愁だけだ。

といつても、ギリギリで保っている状態。

とりあえず落ち着かせるために、俺は状況の整理をはじめることにした。

ここにいるのは全部で10名。

女が3人、男が7人だ。

白い男のことはとりあえず【管理人】と呼ぼう。

管理人はゲームの説明をした。

タイムリミットの24時間までにここから出る。

扉のどれか一つが正解の扉。

まだ誰も扉を開けていない。

天使の絵の書かれた扉もまだだ。

天使の扉に入ればタイムリミットをのばす事が出来る。

しかし扉を間違えれば死が待っている。

何かが引つかかる気がするが、全くわからない。

信じるか信じないかは今はおいておいて、まずはここから出る事を考えるべきだ。

「だれか携帯持っている人はいませんか？

他にも脱出出来そうなものとか」

誰も答えない。

答えるとこのゲームを認めることになってしまつからだろうか。

「俺持つてる」

愁が答えた。

「つながる？」

「ちょっと待って……。」

無理だ、つながらない」

これで警察に連絡するという希望はたたれた。

このまま黙っていても仕方がない。

しかし、他の奴等は言っても聞かないだろうから俺一人でやるしか

ない。

散策しようと思い、その場を動くと、愁が俺の肩を叩いた。

「蓮、俺も手伝うよ」

「ありがとう」

あらためてこいつがいてくれて良かったと思う。

「俺、この前脱出ゲームの映画を見た。」

それにしてもこのゲーム、大まかすぎると思う」

最近近所の奴がはまっていて、一緒に見に行く事になったのだ。

確か、ラストは主人公だけが生き残るって感じだったっけ。

「どうゆうこと?」

「俺が見に行った映画の場合、脱出できる確率はここまで低くなかった」

このゲームの場合出られる確率は今のところ100分の1。

勘で当るような数字ではない。

これが引つかかっていたのか。

でもこれだけじゃない気がする。

「とりあえず散策でもしてみようか」

「そうだな」

散策を試みたが部屋には何も置かれていなかった。

「何もないな」

「うん。」

……あれって開きそうじゃない？」

愁が指したほうを見ると、確かに開きそうだ。

ふたのようになっていて、持ち上げれば開くようになっている。

床ということは地下につながっているということだろうか。

俺達は慎重にふたを持ち上げた。

結構重たい作りになっているので、女一人では持ち上げられないだろう。

階段があり、それを降りていくと、そこはやはり地下へとつながっていたが、もとの部屋と同じ白い部屋だった。

そのかわりにいくつかの部屋に別れていて、それぞれ生活最低限のトイレ・洗面所などの部屋だった。

食料も1週間分くらい置いてあった。

どうやら管理人は俺達を餓死させる気はないようだ。

毒が入っている可能性もあるが、食べないわけにはいけないので、二人で10人分の食料をもって行く事にした。

「痛っ」

何かにつまずいた。

足元を見るとペンが落ちていた。

近くにはメモもある。

「何か意味があるかもしれないよ。」

一応持って行ったら？」

俺は愁のいうとおり、この二つを持って行くことにした。

プレイヤー

残り10名

タイムリミット

残り24時間26分

本能寺の変

皆に食料を配った。

何も言わずに受け取って食べはじめた。

礼くらい言えよ、と言いたかったが、ここでキレても皆の精神を壊してしまっただけなのでやめた。

地下の事も話した。

すると一人がトイレに行った。

それに続いて数人が地下へと向かった。

俺は愁としばらくメモとペンについて話し合った。

ペンには特に変わったところはない。

普通の黒いボールペンだ。

しかしメモには隅にパラパラ漫画が書かれていた。

はじめは多分織田信長だ。

織田信長と敵らしきものが戦いをくりひろげるのが描かれていた。

しかし、最後だけ色が使われており、織田信長が赤で塗りつぶされていた。

意味は分からないがヒントだろう。

俺はあまり歴史に詳しくないので分からない。

愁も詳しくないらしい。

「誰か詳しい人がいればいいんだけど……」

愁がつぶやくと、一人の男が声をかけた。

「それは？」

年齢は40代くらいだろう。

さっき初めにトイレに行った人だ。

俺が持っているメモをのぞきこんだ。

「さっき見つけたんです」

「これは織田信長……かな？」

「はい、多分。」

あなたは……？」

俺が聞くと、苦笑いをして白髪混じりの髪を掻いた。

「失礼。」

私は本居 茂です。

知ってるかな？」

本居さんが自己紹介と、愁が目を見開く。

「本居 茂ってあの漫画家の！？」

「ええ、まあ」

「僕ファンです！」

「それはうれしいです」

俺は漫画を読まないのであまり分からないが、名前は聞いた事がある。

よくテレビに出たりもするので、結構有名らしい。

「次は織田信長をもとにした物語にしようかと思ってるんだ。

そのために勉強してるのさ。

だから私に分かることがあれば協力するよ」

「ありがとうございます」

精神が安定している人が増えて助かった。

愁も憧れの人物に会えた事もあって、かなり嬉しそうだ。

「ちよつと見せてね……。」

戦っているのは大まかだからよく分からないなあ。

有名なのは桶狭間の戦いとか長篠の戦い。

最後のこれは本能寺の変じゃないかな」

確かどちらも中学の頃の歴史で習った覚えがある。

本能寺の変は織田信長の家臣、明智光秀が謀反を起こし、京都・本能寺に宿泊していた主君信長と後継者の信忠を襲い、自刃させた暗殺事件。

大切なのは桶狭間の戦いでも、長篠の戦いでもない気がする。

何の戦いか分かるヒントが他にあるのなら話しは変わるが、答えのないヒントではヒントとは言えなくなってしまう。

「本能寺の変はいつの出来事ですか？」

「確か……。」

天使の扉

「天正十年六月二日だったかな」

「どうしてそんな事聞くの？」

「あくまで推理だけど、織田信長は天正十年六月二日に死んだ。

これは織田信長の命は天正十年六月二日に滅んだ、と同じ意味となる」

「ああ、そうか！これがヒントだとすれば、10・6・2の扉は命が滅びるというわけか」

「そうとも考えられる。このなかに数字はそれしか書かれていないし」

「とりあえずメモしておこうか」

そう言つて、本居さんがメモしようとした瞬間、突然画面から映像が飛び出した。

部屋にいる全員が注目する。

『もう一つ目の謎を解かれたのですか。

簡単すぎましたかね？

では、2・6・10の扉をロックします』

管理人が言うと、扉の鍵が閉まる音が聞こえた。
本当にロックされたようだ。

『ところで、3人以外誰もまだ行動していないようですね。

実は、いくつかのイベントを用意してあります。

イベントは全員強制参加です』

誰もが黙って下を向いている。

関わりたくないという様子だ。

俺達三人ですら下を向いていた。

イベントと言っているが、裏があるに決まっている。

『このゲームから逃げたいとは思いませんか？

逃がしてあげます。

但し、一人だけです』

この言葉に下を向いていた頭が全部上がった。

『天使の扉に入ってください。

そうすれば逃げられるでしょう』

画面から管理人が消えた。

管理人は俺達の中から一人だけ助けると言った。

これは本当なのか？

ただ皆を混乱させて楽しむためのイベントでは……？

「俺が入るんだ！」

「いいや俺だ！」

「俺だ！」

管理人の罠に何人かがはまってしまった。

1の扉の前で、3人の男達が争っている。

「落ち着いて下さい！」

俺の声は誰にも届かない。

ついには殴りあいをはじめた。

部屋中に鈍い音が鳴り響く。

女達は3人知らないもの同士、こんなときでも肩を寄せ合って、誰も入れまいと群れを作っている。

「だからやめて下さい！」

俺の声は結局届かず、男達の中で勝者が一人生まれてしまった。

その男は片方の口角を少し上げて見せて、扉のドアノブに手をかけた。

ゆっくり開くと、次は声を上げて笑いながら中に入って行き、「負け組み共はここで息絶えればいいってことよ」と捨て台詞を残して扉を閉めた。

本当にあの男は助かってくれればいいのだが。

「きつと大丈夫だよ」

愁が俺の肩を叩く。

「そうだといいいけど……」

しばらくして閉まっていた天使の扉が開いた。

当然中には誰もいないと皆思っていた。

しかし中にはまだ男が立っていた。

男の顔は蒼白で、生きている感じがしない。

男はふらふらと床に倒れ込み、そのままぴくりとも動かなくなってしまった。

本居さんが男に近づいて行き、呼吸と脈を確認した。

「死んでる……」

「いや――――！！！！！！！！！！」

女達が悲鳴を上げる。

俺と愁も顔を背けた。

プレイヤー

残り9名

タイムリミット

残り22時間15分

地獄の扉

死体から皆が視線を逸らす。

同時に現実からも目を逸らした。

「おい、どうせドッキリだろ？」

はやく止めようぜ」

一人の男が声を上げた。

女達はまだ固まったまま動かない。

俺達三人も、今までの様な余裕はなくなってしまった。

自分でも今までどうしてあんなに余裕があったのかが不思議だ。

多分俺達が一番現実逃避をしていた。

行動する事で冷静を装って、自分で自分を紛らわしていただけだったのだ。

でも現実逃避はもうできない。

俺達はこのゲームが現実だと知ってしまったのだ。

死体はまだ放置したままだ。

呼吸と脈を確認して以来誰も振れていない。

そのまま放置していると、死体が腐って腐乱臭がしてくるだろう。

そんな事を考えていると、また画面に管理人が映った。

『一人目の死者が出ましたね。』

死体は43の扉に入れてください。

入れると30秒後にロックがかかるのでお気をつけを』

笑いながら画面から消えた。

「どうする？」

「入れるしかないな」

愁に話かけられ、平静を装った。

俺が足、愁が頭を持って天使の扉の中から男を出す。

力の全く入っていない体はかなり重たい。

男二人でもやつとだ。

感触は土の様だった。

自分も死ねばそうなるのかと考えるだけでぞつとする。

俺は考えない事にした。

43の扉の中に男を入れる。

本当にこれでいいのかは分からなかったが、逃げたい一心で急いで男から離れた。

扉の外に出ると、すぐに扉を閉める。

すると天井から『30秒前・29・28・27……』とカウントをする声が聞こえた。

俺達はそれを最後まで聞き続けた。

『3・2・1』

1、と同時にロックがかかる。

「ちゃんと天国に行けるといいね」

「ああ……」

でも、男が行ったのは天国ではなかった。

落下音が部屋中に響きわたる。

「イヤーーーーー!!」

女達が悲鳴を上げる。

俺は耳をふさいだ。

『しかし、それ以外の扉に入ってしまうと……。』

地獄へ落ちるでしょう』

管理人の言った通り、男は地獄へと落ちたのだ。

『タイムリミットものびた。』

扉も一枚ロックされた。

一石二鳥、ですね？』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7408v/>

99の扉

2011年10月9日12時37分発行